

# 私が私であるための存在の二元性

——ピラニスム確立期のピランについて——

メーヌ・ド・ピラン研究 (III)

藤 江 泰 男

Dualité constitutive de mon existence

Yasuo FUJIE

## 目次

- I. メーヌ・ド・ピランの思想的発展の概観, あるいは予備的考察
- II. ピラニスムの第一段階（努力の心理学）
  - 1) ピラニスムの成立前夜（以上前号）
  - 2) 努力の心理学の確立（以上本号）
- III. 諸原理の科学から最後のピラニスムへ

## 2) 努力の心理学の確立

われわれはすでに前号において、ピラニスム（ピラン哲学）の成立前夜について、フランス・アカデミーでの彼の最初の受賞論文『思惟能力に対する習慣の影響』（1802年）を手がかりに論及している。努力感として語られることの多い彼の哲学の核心が、この時期にいかに提起され表現されていたかを、「ピラニスム成立前夜」と題して、自我の捉え方を中心に粗描しておいた。

今回は、それを踏まえて、ピラン哲学の核心部分・努力の心理学の内実を、これも同じくアカデミーの受賞論文となる『思惟の分解について』（以後、『思惟の分解』と略記する）と『直接的覚知について』（以後、『直接的覚知』と略記する<sup>1)</sup>）という二つの論考<sup>2)</sup>を手がかりに探究してみたいと思う。

### (1) 哲学史的批判からピラニスムへ

メーヌ・ド・ピランが、当時の支配的哲学たるイデオロギーの立場を決定的に脱却して、

---

1) メーヌ・ド・ピランの著作からの引用は、前回の論文同様、アズヴィの監修・責任編集による著作集を中心とするが、ときに、ティスラン版からの引用が必要となる場合もあるので、二つの版の区別をA、Tという文字で最初に示し、その直後に巻数とページ数とを表記する。例えば『思惟の分解』であれば、アズヴィ版では三巻に収められているので、A, IIIとなり、ティスラン版では三巻と四巻にわたっているので、T, III-IVという具合になる。もちろん通常は、直後に、参照すべきページがアラビア数字で続くことになる。

2) それぞれ、フランス・アカデミー、ベルリン・アカデミーの提題に答えた受賞論文。

彼独自の哲学、いわゆるピラニズムを確立するのは、すでに略述しておいたように1805年の受賞論文『思惟の分解』においてであるが、その決定的視点 (point de vue) の提示は、ピランの応募論文では通例となっている、序論的部分<sup>3)</sup>での批判的な哲学的検討を通じて、まずは現われることになる。

イデオロジストたちがその思想的基軸を求めるロックの哲学も、この時点でのピランには承認できるものではなかった。それゆえに、従来のイデオロジーの立場、つまり「客観的イデオロジー」とは異なるイデオロジーの立場、ピラン言うところの「主観的イデオロジー」の立場を模索し確立する事が、本受賞論文の主題ともなるのである。その「受賞論文版 (version couronnée)」のテキストの表現で違いを辿れば、「客観的イデオロジー」とは、「可感的存在への依存関係を、主体が外的事物から受け取る多様な印象、それにより形成される諸表象などのうちで決定しようとする」イデオロジーであり、これに対し「主観的イデオロジー」とは、「思惟する主体 (sujet pensant) の内部に集中し、もっとも内的な (intimes) 様態とその固有の基盤から生ずる行為とにおいて、それが自分自身と維持する関係を解明しようとする<sup>4)</sup>」イデオロジーであると、それぞれに規定されている。感覚や表象との関係で自己の思惟を分析し解明しようとする当時の支配的イデオロジーに対して、ピランの主張するイデオロジー・主観的イデオロジーは、主体に深く沈潜するなかで、「反省的方法、あるいは内的な観察の方法<sup>5)</sup>」を徹底するなかで、前者の限界を克服しようと目指すわけである。この主観的イデオロジーの可能性を探ることが、この時期のピランのまさに中心的課題であったと言えよう。より明快な表現で定義されている『思惟の分解』の「修正版 (version remaniée)」の方で当該箇所を引用して、その間の事情を確認しておこう。

**主観的イデオロジー、思惟する主体 (sujet pensant) の意識うちに閉じこもり、自分の知的行為の自由な行使において、自分自身と維持する内的な (intime) 関係を解明しようとする主観的イデオロジーと、可感的存在を外的事物に結び付ける関係に基づいて基本的には構成された客観的イデオロジーとの間に、少なくとも何らかの違いを確立することが必要ではないのかどうか (……)<sup>6)</sup>**

彼の論考の主題が、感覚的印象や表象という、いわば受動的状態での思惟のあり方に即して、あるいは外部との受動的関係に即して主体を、思惟する主体を捉えるのではなく、思惟の内部に注意を集中することから、あるいは主体の自由な行為を分析することから、つまりは、主体の能動的で自由なあり方に注目することから、思惟する主体の解明、「思惟の分解」を目指すものであることを、ピランはここで、いくぶん控え目ながら言及してい

3) もっとも、『思惟の分解』で「序論 (introduction)」と銘打っているのは、修正版の方で、1805年の受賞論文のテキストには第一部とあるだけで、序論の文字はない。しかし、内容的には同一の役割をになった構成になっている。

4) 『思惟の分解』A, III, p. 25.

5) *Ibid.*, A, III, p. 60.

6) *Ibid.*, p. 308. この方法論的対立を、「受賞版」の方では、思惟能力の「分解」に関する方法論的コメントの件で、コンディヤックの一元的方法を批判した後、自身の立場の表明とも併せて、「異なる二つの観点」として言及している。「われわれの行為 (actes) の内部において取られる観点と、外部において取られる観点、という異なる二つの観点であり、要するに、主観的イデオロジーは、客観的イデオロジーとは異なる」(*Ibid.*, p. 60) と語る。Cf., 『直接的覚知』A, IV, pp. 9-10.

るわけである。それは、受動に対して単に能動を対置する、ということではなく、従来、受動的のものと考えられ、そう取り扱われてきたもののうちに、能動性のモメントを発見する試みである、という点にまず留意しておくべきであろう。それは、すでに『習慣論』において、感覚作用と知覚作用との決定的違いとして、萌芽的に到達されていた立場でもある。

さて、こうした基本的志向からすると、ロックの立場はきわめて不十分なものとして立ち現われる。それはまず、観念の源泉として指摘される感覚と反省のうち<sup>7)</sup>、後者の要因が軽視されている、という点でビランには不十分であると思われたし、さらに三項目に整理して、問題点が指摘されている。つまり、本当の源泉にせまることの困難さ、「始まりからはじめること<sup>8)</sup>」の困難さとして、それは言及される。

まず、1) 意識の外に実体的思惟の原理を認め、その能力を生得的なものとして、魂の源泉を目指さないこと、次に、2) 形而上学者たちの同意するところに従って、悟性(受動的能力)と意志(能動的能力)との区別を認めたことで、能動性が意志にのみ振り分けられることになり、悟性(反省を含めて)の能動性について問うこと、その能動性の源泉について問うことをしなかったこと、従って、観念の歴史的、記述的分析に終始したこと、最後に、3) 人間の悟性が現に構成されている通りの、一般的メカニズムの分析に終始し、運動力(能動的能力)の源泉にまで遡る必要を感じることはなく、われわれの能力の対象や産物に注目するのみで、その能力自体のあり方や力量には関心を示さなかったこと<sup>9)</sup>、以上の三点にわけて論じられている。

ビランからすれば、ロックの『人間悟性論』では、知的な諸能力の原初的条件や生成状況などが、主観ないし主体に即して正しく探究されていない、というわけである。ロックの方法についてコメントしながら、知的な行為や作用の内的な反省が徹底されていない、とも批判している。従って、ロックのうちに認められる主観的イデオロギーの萌芽を正しく発展させることが、本論考でのビランの課題ということになる。

『人間悟性論』は、人間の知性について、本来の意味における諸作用を分析した論述というよりも、一般的イデオロギーのなお不十分な論理学ないし試論であるにしる、そこには、諸能力の科学の対象と基礎とについて特別の手がかりを見いだすことができる。(.....)<sup>10)</sup>

観念の単なる論理的整理のレベルを超えて、反省から単純観念への具体的な生成過程に注目して、それを「主観的イデオロギー」として展開しよう、と願うわけである。

このように、ビランの意向は、悟性に内在してそのうちから能動性の契機をえぐり出し、主体の本来の能動性とその構成要素とを、その「はじまりから」分析的に明らかにすることである。反省とは、従って、その「はじまり・原初的狀態」にせまることを課題とする

7) ロック『人間悟性論』第二巻第一章。

8) 『思惟の分解』A, III, p. 351; T, III, p. 72.

9) 『思惟の分解』A, III, pp. 351-352; T, III, pp. 72-73.

10) *Ibid.*, A, III, pp. 353-354; T, III, p. 75.

方法にまで昇華さるべきものである。結論を先取りして言えば、この反省的志向の迫り着く先が、原初的事実・自我の二元性ということになる。

こうしたメーヌ・ド・ピラン独自の観点 (point de vue) ないし視点は、デカルトのコギトを検討するなかで、よりポジティブな形で浮上してくるように思われる。前述したロックの著作の批判的検討の次に来るのが、まさにその件である。まず、そうしたピランの立場が明確に表現されている箇所を引用しておこう。

反省から出発しつつも、デカルトはおそらく、自分のうちに退行して自分の存在を肯定し、そこから絶対的実在を結論するこの自我が、まさにそれ故に、ある行為 (action) をなすのであり、ある努力をなすのである、ということを十分に観察しなかったようである。ところでどんな行為も、本質的に、また現実において、主体 (sujet) とその対応項 (terme) とを前提にしていないだろうか。努力を絶対的もの、そして抵抗を伴わないものと理解できるだろうか。自分の身体<sup>11)</sup>の現存よりは自分の魂の現存の方がより確実であると信じたとき、明らかにこの思弁的天才は幻想を抱いていたのである。というのも、彼は、身体<sup>12)</sup>の共-存在 (co-existence) の連続的で内的な感覚 (sentiment intérieur) をもつことなしには、思惟することも彼であることもできなかったのだからである。……<sup>11)</sup>

以上の文言は、本文への註釈として記された件であるが、デカルトのコギトの確実性に関していずれの側面に問題点を見ているかが明確に示されている。身体から分離された限りでの魂の存在の確実性、さらに、身体や物体の存在の確実性に先行する魂の存在の確実性、というデカルトのコギトにとっての核心部分が、いずれも批判され否定されているのが分かるであろう。そのデカルトの弱点を補完すべくピランが持ち出すのが、他でもない「努力」の概念なのである。思惟作用自体が本質的に孕んでいる努力としての能動性を自覚すれば、魂として実体化された意識のあり方に、本来構成的に伴う対応項たる身体的要素の存在は、実は意識と同時的に明らかなのであり、ないしは権利的に同程度に明らかなのであり、従って、意識の存在と身体<sup>13)</sup>の存在とは、コギトの場で同時的に発見され証明されていなければならない、というのが、ここでのピランの基本的主張である。身体を「共-存在」というタームで語っているのも、ピランの観点からすれば、自然な表現と言える。思惟作用の本来的能動性 (努力) の側面にデカルトは気づいていないのである。それが〈心身二元論〉をもたらす源泉であり、精神の独立的存在の主張を支える基盤である、と喝破されているわけである。意識に本来的能動性を回復すること、それはそのまま、自我の身体的あり方を正当に評価することにもなる、というメーヌ・ド・ピラン哲学の基本的構えが、ここですでに明瞭に宣言されている、と言っても過言ではない。先の引用箇所に続いて、ピランは、デカルトをはっきりと断罪する。「デカルトは、存在 (existence) を思惟に結合することにも、思惟を行為に結合することにも失敗したのである<sup>12)</sup>」と。

11) *Ibid.*, A, III, p. 364; T, III, p. 92 の註釈。

12) *Ibid.*

かくして、哲学史的展望のなかで問題の所在は明確になり、メヌ・ド・ビランの向かうべき方向は定められた。後は、現実の意識に内在した分析、つまり反省的な思惟の分解を記述する件が来ることになる。では、ビラン独自の方法とその成果について、自我の捉え方を中心に再考しておこう。

## (2) 努力感、あるいは私の存在の二元性へ

身体との関係を本質的構造として含む自我の二元性の構造が明確に提起されているテクストを、まず『思惟の分解』で検証しておこう。努力感と抵抗というピラニスム特有のタームを使用して、はじめて明確に表現された、と言えよう。それがまた、前述した哲学史的批判の原点であり、抛り所であったわけである。

唯一の主体・自我のうちに基礎をもつものと見なされうる一種の感覚作用が存在する、と私は言う。それは、努力の相関的様態 (*mode relatif*) であり、自由にかつある種の条件に従って（それについては後に述べるであろう）行使され、器質的抵抗 (*résistance organique*) の感覚と結びついた、生きた力の内的な感覚 (*sintiment intime*) を含んでいる<sup>13)</sup>。

これは、『思惟の分解』の序論的部分を終えるにあたって、思惟の「分解」のための新たな方法の提言を、ビラン自身の基本的着想に即して述べた件の一部を引用したものである。

自我のうちに、努力の感覚（内的な感覚）とそれに連結した身体的な抵抗（器質的抵抗）の感覚とが認められること、それは広い意味での感覚作用であり、その一様態である、と語っている。これは、純粋な受動的感覚作用（純粋な感受作用）から知覚的で能動的な思惟作用（知覚作用、覚知作用）にまで及ぶ広い意味で、感覚作用と表現されている、ということである。努力の内的感覚さえも「一種の感覚作用」と言われるゆえんである。

感受作用 (*affecton*) と知覚作用 (*perception*) とが、感覚作用 (*sensation*) を類とする種差として示されている、と言え方がいいのだろうか。感受作用から知覚作用までが、ある種連続的に感覚作用のなかで、受動性と能動性という二つの視点に即して、その後者のモメントの高まりに対応する形で、連続的に見られているわけである。能動性をまったく欠いた純粋な感受作用、あるいはまったく受動的な感覚作用から能動性が支配的な知覚作用、さらには覚知作用 (*aperception*) まで、感覚作用の枠の中で位置づけられ、分類されているわけである（この比率の問題は、そのまま思惟の分解の具体的実践にも繋がるものであり、『思惟の分解』第二部の主題となっているものである）。

さて、この着想が『思惟の分解』の方法的基盤であり、その後の具体的分析・分解の記述も、この点を抛り所として展開されるということを、先の引用に続く件が明記している。

ここには、外的世界から来る、いかなる感受的印象も入り込むことはできないであろう。だからといって、その感覚作用が十全的でないわけではない。われわれの能動的能力の特別の源泉を求めるところは、恐らくそこであって、何らかの受け取られた印象の

13) *Ibid.*, A, III, p. 362; T, III, p. 84.

うちではないであろう。存在の支点 (point d'appui) と、われわれ自身とわれわれの知的な行為とから獲得できるあらゆる単純な観念の根拠とを求めるべきところは、そこなのである。そこがまた、思うに、能力、力、原因といったすべての観念の模範的原型 (modèle exemplaire) なのである<sup>14)</sup>。

われわれの思惟能力の分析のための視点にして支点であるものが、ここに発見され、定着されているわけである。この努力、この能動性の由来としての自我なる主体からはじめて分析すること、それが、本論文でのピランの基本的着想であり、哲学史的検討の出発点であるとともに帰着点でもある、と言えようか。能動性の由来を自我のうちに見る、ということは、能動性の発露が認められない段階ではまだ自我が成立していない、ということ、無意識的・身体的反応のうちには自我や人格は存在しない、ということになり、ここにピランの判断の根拠が示されているわけである。

ピランによれば、単なる感受作用のみであれば、その由来は外部や自我とは分離された身体のうちになく、それは自我の成立・覚醒なしに可能なのである。人間の「動物的生<sup>15)</sup>」の段階と言える。そこでは、原因は自我の外、質料 (物質) の側にあり、「人格性の形相が多かれ少なかれ奪われている」状態とも表現されている。これに関わる主体は、いかなる能動的な機能も果たしておらず、そこから悟性も意志も帰結することはない、というわけである。ある種の能動性が介入してこそ、悟性も意志も、つまりは人格も成立する、ということが、ここで明確に表明されている。その意味で、この段階の感覚を「不十全な感覚作用 (sensation incomplète)<sup>16)</sup>」と呼ぶのは妥当であろう (もっとも、ピラン自身、この定義を必ずしも厳守してはいないようであるが……)。形相を伴わない質料だけの感覚作用しか、そこには生じていないからである。

かくして、メーヌ・ド・ピランの抱く自我のイメージが、より判明化したように思われる。単なる受動的な感受の状態のなかでは、自我はまだ成立していない、あるいは自我は覚醒していない。あくまで、ある種の能動性、ある種の意識性が生じたとき、感覚作用に即して言えば、そこに形相的要素つまり知覚的能動性が成立したとき、はじめて自我も成立し自覚されている、つまり覚知作用が成立している、という考え方である。次に続く一節が、そのことをより明瞭に示している。

この二種類の原初的要素、自我とは不可分で、意志の産物である努力と、器質的特性からの非人格的帰結である感受作用、一様で永続的な一方の要素と多様で可変的な他方の要素とは、さまざまな仕方で連合されうるし、われわれの存在 (existence) の実在的で現実的なあらゆる様態を、感覚作用と知覚作用とのあらゆる種類を構成しうるものである。それらの種類には、かくて、質料と形相とが、あるときは不完全かつ偶然的に結

14) *Ibid.*, A, III, p. 362. Cf., A, III, pp. 71–72.

15) ピランのいわゆる「三つの生」としては、動物的生、人間の生、精神的生が区別されているが、動物的生については、グイエ、前掲書 (『メーヌ・ド・ピラン 生涯と思想』) の第五章「人間の科学—動物的生と人間的生」が詳しく展開している。

16) Cf., 『直接的覚知』A, IV, p. 58.

合されて含まれることもあり、またあるときは、緊密かつ必然的に組み合わされて、後に説明されることになる、ある種の条件に沿って含まれることもある<sup>17)</sup>。

永続的で一様な自我と可変的で多様な感受作用とが対比され、自我の能動性が努力との同一化において表現されているとともに、感受作用については、身体的機能の行使のみで人格的なものではないことが、明瞭に示されている。それは、形而上学の伝統的術語である形相と質料というタームを使って、再度表現されている。知覚なり感覚として表記されるわれわれの思惟能力は、その源泉としての自己、能動性としての努力との関係で明らかにされ、分析・分解されねばならない、というのが、この件でのメーヌ・ド・ピランのメッセージなのである。上の引用箇所は修正版からのものであり、より明快な表現に仕上げられている。

さて最後に、こうしたピラン的自我ないしピラン的コギトのさらなる分析を、『思惟の分解』の第二部の展開や『直接的覚知』での「原初的事実」の考え方などを検討しながら見ておこう。

### (3) 二元性としての私（『直接的覚知』を中心に）

これまで『思惟の分解』のテキストを中心に、つまり、感覚や知覚、努力感などの分析を通して、メーヌ・ド・ピラン描くところの「自我ないし私」の存在の捉え方を見てきたが、これからは、そうした着想が、より自我の構造に即して展開される『直接的覚知』（1807年、ベルリン・アカデミーの受賞作<sup>18)</sup>）のテキストを中心に、「内感の原初的事実」として明らかにされる「自我の二元的構造」について検討しておこう。『思惟の分解』（受賞版）の二年後の著作ということもあって、ピランのまどいの時期はすでに終息し、より明確な二項関係において、「自我（私）」の構造が析出されている。『思惟の分解』の「受賞版」と「修正版」との間に認められる、表現上のあきらかなズレや明快さの違いなどを見てきた後では、そこ、『直接的覚知』には、すでに十分に熟成したピラニスムをわれわれは認めることができるであろう。

先の「努力」ともなう思惟様態の分析において、身体感覚（器質的抵抗）と意志がともに体験され確認されていたように、あるいは、努力の存在、つまりデカルトのコギトで言えば、「思惟」の存在が、「身体」感覚（ピランのよく使う例で言えば、筋肉の収縮運動の感覚<sup>19)</sup>）とともに確認されているように、ピラン的コギトにおける自我の存在の確認は、意志という思惟的作用が身体感覚に支えられて成立する、という構図で主張されることになる。結論を先取りして言えば、思惟の存在が、単に思惟のみで確認されるのではなく、身体との関係において、身体が存在と切り離されることなく証明されるという構図、

17) 『思惟の分解』 A, III, p. 363; T, III, pp. 84-85.

18) 前号「ピラニスムの成立と変容をめぐる——メーヌ・ド・ピラン研究(I)——」参照。

19) 『思惟の分解』の少し先のテキストで言えば、「われわれの現在の存在のあらゆる多様な様態のうちで、交互に二つの在り方が経験されるような様態が、すなわち、受動的で単純な感覚作用と能動的で二重化された知覚という二つの在り方が交互に経験されるような様態が、なかならず一つある。それは、筋肉収縮の行使に伴う様態の特殊な性格である。つまり、〈意志〉といわれる力の直接的影響のもとで収縮がなされるときの努力をともし運動の知覚のことである。こうした影響がなければ単純な筋肉の感覚作用があるだけである。」(A, III, p. 403; T, III, p. 132)

これこそが、ビランのコギトの核心である。

身体を伴わない思惟の存在、デカルト風に言えば、身体と分離された精神の存在など、もともと証明しようもない存在、ビランのテキストに頻発する表現を借りれば、「抽象」によるフィクション、とでも言うべきものなのである。むしろ、精神の存在証明は、同時に身体が存在証明に通じてしまう、と言ってよいかも知れない。精神の存在をコギトによって証明した後、物体の存在証明に移行し、悪戦苦闘の末デカルトは、確実な証明には至りえないことを間接的に告白せざるをえなかった、という帰結を理解する者には、つまり、デカルト哲学のいわゆる「根拠の順序<sup>20)</sup>」を知る者には、目から鱗が落ちる、と言うべきか、あるいは、あまりにもあっさりと、と言うべきか、いずれにしろ〈思惟と身体との同時的な存在証明〉を、ビランは語るのである。

さて、『直接的覚知』でのビランは、形相的・質料的という二つの視点を明瞭に射程に入れて、内感の原初的感覚のなかで区別すべき二つの要素に注目している。単一的で恒常的な側面として形相的要素を一方に、人格的側面のまったくない質料的要素をもう一方に抽出している。前者が自我に関わり努力と呼ばれる能動的様態であり、後者が受動的様態で、その極限においては、人格・時間・空間ともに欠落していることもありうる感受作用を意味している。次に引用するテキストは、その能動的様態について述べた件である。先の『思惟の分解』の引用箇所を補完する意味でも、まず読んでおこう。

あらゆる他の種類の感覚作用とは極めて異なる個体的様態があり、その様態が、知覚作用の主体のうちに、自我（それが十分に構成されるのは、おそらく、自分において、かつ、自分によって、でしかないのだろうか）のうちにその唯一の根拠をもつかぎり、形相的と見なすことが認められる、とまず第一に私は述べる。この能動的様態は、私が努力と呼ぶ様態であり、それは、自由に、かつ、これから規定されることになる、ある種の条件に従って行使されるもので、それを絶えず生み出す生きた力の直接的【覚知】のうちで、器質的（身体的）ないし質料的（物質的）抵抗（*résistance organique ou matérielle*）という相関する感覚を含むものである。そうした抵抗は、対象としては自我（*moi*）の外部に、力の適用点としては力の外部に、必然的かつ原初的に知覚されるものである<sup>21)</sup>。

つまり、受動的要素を特徴とする感覚作用と形相的あるいは質的に異なる様態、能動的な「努力」の様態とは何かを述べる件であり、それが自由な行使に関わるものであることが説明されているとともに、その努力と身体的抵抗ないし外部の物質的抵抗とが相関的なものとして提示されている。力が力の及ぶ対象を介して理解され自覚されるように、努力もまた、それが及ぶ対応項・適用点、つまりは身体や外的物体との関係で自覚されるもの、

20) Cf. ゲルー『根拠の順序によるデカルト』。周知のごとく、デカルトの証明は論理的な必然性をもつことはできず、自然的傾向性に即するかぎり（それはまた神の誠実性に基づくかぎりでもあるが）説得力をもつものでしかなかった。マルブランシュによる物体の存在証明の批判もまた、もはや周知のところであろう。

21) 『直接的覚知』 *De l'aperception immédiate*, A, IV, pp. 56–57.



と述べられているわけである。努力と抵抗、それは二つそろってはじめて成立できる、いわば相関的二項関係である。力と抵抗との関係が、ある種「不可分で本質的な<sup>22)</sup>」関係と表現されるゆえんでもある。区別は明らかながらも分離できない二項的關係、それが努力と抵抗、自我を構成する二つのモメントなのである。

さらに第二点として、「直接的覚知」とは、この二つの項〔努力と抵抗〕のいずれをもその本質的構造として含むもの、と理解せねばならない<sup>23)</sup>、と述べた後、さらにピランは語る。

他方（ないしは他の観点からは）、単純な、絶対的な、素材（質料）にまで還元されるような感受作用が存在するし、存在しうる、と私は言う。それらの感受作用が、生きた身体、ないしなんらかの意味でまったく受動的な印象のうちに、そのあらゆる根拠をおく場合のことである。人格性のどんな形態も剥奪された感受作用、さらに、単一性、同一性、実体性、おそらくは空間や時間の形式さえも認められない感受作用は、不十全な感覚作用（sensations incomplètes）としか見なされ得ないであろう。知的な個体的作用のいかなるものも、源泉として、そこに結び付けられることはできないであろうし、コンディヤックがその彫像の絶対的な第一次的感受作用からそうしたように、変容（transformation）によって、そこから演繹されることもあり得ないであろう<sup>24)</sup>。

原初的事実から人間を捉えようとするピランが、そのなかでまず、二つの根本的区別ないし対立を見ているのが分かっていく。人間の感性（sensibilité）と知的な能動性との区別である。あるいは、感受的感性（sensibilité affective）と意志的運動性（mobilité volontaire）と言ってもいいような区別のことである<sup>25)</sup>。ピランにとって欲求（vouloir）や意志の介入が、人間の個性ないし自我の成立条件であり、知性や判断もそれ自体意志的な運動性に含まれる。前者はまったくの受動性であり、人格にとっての素材ないし質料（matière）ではあっても形相ではない<sup>26)</sup>、本質を形成できるものではない、ということである。

この意志的側面を欠いていることが、人間と動物との違いや、正気と狂気との違い、ないしは、その中間の変質的な状態との段階的な違いを説明することになる。幼児期の記憶が残らないことも、素材だけがあってそれを整理する（時間や空間のなかに組み入れる）形式・形相がないことで説明がついたりもする<sup>27)</sup>。つまり、ピランにあっては、感性には、形式の伴わない、素材だけで成立しているものもあることが、はっきりと想定されているのである。

原因ないし努力については、外的物体を知るのとは異なる仕方で知られること、この内感ないし内的感覚と客観的知覚（ないしイマージュ）との区別が正しく理解されていないことが、多くの哲学者たちの混乱の主要な原因をなす、とピランは見る（コンディヤックにしろヒュームにしろ、この点では変わらないのである）。

22) *Ibid.*, p. 57.

23) *Ibid.*

24) *Ibid.*, pp. 57–58.

25) *Ibid.*, p. 67.

26) *Ibid.*, p. 68.

27) *Ibid.*, p. 71.

こうした前提でゆくと、異なる二つの目が必要となる<sup>28)</sup>、とまでビランは語ることになる。すなわち、内側と同時に外側を見る目が。原因が働きかける「効果的手段について知ること」と、この原因の「効果を感じる」とは、要求自体が異なる（ないし矛盾している）ということである。「私でありかつ私でない、必要がある<sup>29)</sup>」からである。

光の流れをそれ自身において直接的・無媒介的に知覚しながら、同時に、網膜の視神経へのその影響をも直接的・無媒介的に知覚するためには、うちにおいてと同時にその外においても見ることのできるような二つの目を必要とするであろう。それはまた、意志が筋肉に働きかけるための効果的手段について、その有効性を感じつつ同時にそれを認識するためには、同時にわれわれであって、しかもわれわれと異なる必要がある、といった場合と同様である<sup>30)</sup>。

覚知は直接的に、つまり無媒介的に、その自由な決定の中で自覚されるとともに、媒介的にも、不活動な（morte）抵抗（外的物体）において自覚される、とビランは言う。つまり内的な直接的覚知と外的な（媒介的な）覚知がともにある<sup>31)</sup>、ということである。しかも、ここではこの二つの項が相関的な一つの関係として提示される、ということが大切である。われわれの自我、努力の主体の存在と、物体的もの（身体ないし外的物体）の存在とが、ともに同時に確信されるということである。「こうした信憑（確信）は、それ自体内感の原初的事実であり、（……）」とビランは続けて記述している。

この努力は、単にその自由な決定において直接的に覚知されるのみではなく、不活動（惰性的）な抵抗において媒介的にも覚知される。その抵抗とは、欲求の生きた力に対してある支点ないし自然の適用点を提供することで、その力を実現し、行使させるのであるが、また、その力に、意識や十全な覚知を形成している内的な二重化の性格を与えるのである<sup>32)</sup>。

かくて、われわれは、ビランの原初的事実としての自我の構造に辿り着いたようである。意識ないし覚知の本性的二重性、つまり、力と抵抗〔努力と器質的・物体的抵抗〕とで形成される意識ないし覚知のあり方が、ここに明瞭に定着されているのが、もはや誰の目に

28) *Ibid.*, p. 121.

29) *Ibid.*, pp. 119–121.

30) *Ibid.*, p. 121.

31) 身体と覚知の関係の問題は、必ずしも単純ではない。ビランの言葉をそのまま迎れば、三種の覚知（つまり、内的で直接的な覚知、内的で媒介的な覚知、外的で媒介的な覚知）が生ずることになるからである。アズヴィはこう解説する。「……内的で直接的な〔非媒介的な〕覚知は、原因たる自我により生み出される状態に及んでいる。そこで、ビランとともに、非-自我の原因を含意する覚知を、媒介的な覚知と呼び、われわれの身体に関係づけられる受動的感覚作用に適用される覚知を、内的で媒介的な覚知と呼ぼう。局在化された痛みの場合、したがって、努力の対応項として器官の直接的で内的な覚知があると同時に、〔痛みを〕こうむる部分として同じ器官についての媒介的な覚知があるわけである」（『メヌ・ド・ビラン 人間の科学』*Maine de Biran, la science de l'homme*, p. 261. 下線は筆者）。このように、身体について内的で直接的な覚知と媒介的な覚知が同時に可能だ、と彼は述べている。これはしかし、後の著作『自然科学と心理学との関係』からまとめたもの。この時期のビランの問題については、次回に論及するつもりである。

32) *Ibid.*, p. 156.

も明らかだからである。

それが媒介的覚知であろうが、直接的覚知であろうが、事情は同じである、とビランは言う。つまり、物体的抵抗により喚起される媒介的覚知（自己意識）であろうと、身体内部で完結する（身体的・器質的抵抗感を介する）直接的覚知（自己意識）であろうと、覚知の二重的構造、自我を構成する本質的二項関係に変わりはない。それがビランの言う、原初的事実における自我のあり方そのもの、なのである。能動性においてしか自我は存在できない、ということはつまり、その器質的ないし物体的抵抗との関係でしか自我の存在は確証できないということである。私があること、それは二重的にあることであり、私の存在の証明は同時に、私を支える物質的ないし質料的モメントの存在をも、併せて証明してしまうのである。

（……）この同じ覚知は、その唯一で同一の原初的事実のうちで、しかも単純で根本的な関係の本質的な形式のもとで、自我と現象的対象とを分かつことなく含んでいるのであり、従って、努力の主体としてのわれわれの自我の存在と物体ないし対応項の存在とを、つまり、それが器質的なもの（organique）であれ、外的なものであれ、同じ努力に抵抗しその覚知のうちに含まれる（理解される）ところの物体ないし対応項の存在を、まったく同程度に確信している、ということが必然的に帰結する。ところで、この信憑（確信）は、それ自体内感（sens intime）の原初的事実なのであるが、それは（……）<sup>33)</sup>

「内感の原初的事実」というビラン哲学のキーワードが、引用箇所の最後に表記されているのが分かるかと思う。努力としての意志的で能動的なあり方が、そのまま、われわれの自我の原初的事実そのものであり、それは、内的感覚つまり内感の原初的事実として、そのまま直接的に覚知される事実であることが、ここに明確に表現され提示されているわけである。

最後に『心理学の基礎』から、「内感の原初的事実」について述べた一節を引用して、本論考の結論に代えたいと思う。二元性としての自我の存在を語る部分であり、この原初的事実こそが、学問の出発点の役割を担うべきもの、と述べる件である。

内感の原初的事実は、器質的抵抗からは不可分の、意欲された努力の事実に他ならず、一般的にその本質は、ある関係、すなわち真の二元性という関係なのである。そして、その本性を確定すること、あるいは、その真の構成要素の特徴を正確に表現することが、何よりも重要なのである<sup>34)</sup>。

33) *Ibid.*, p. 156.

34) Cf., 『心理学の基礎についての試論』 *Essai sur les fondements de la psychologie*, T, VIII, p. 186. 「ティスラン版」の文言はこれと少し異なるが、ここでは「アズヴィ版」のテキストから、*Maine de Biran, la vie intérieure*, présenté par Bruce Bégout, (Payot & Livages, 1995) pp. 60–61 で紹介されている一節から訳出している。

ビランのテキストは、さらにこう続いている。「学問の出発点の役割を必然的にはたす原初的事実は、従って、第一次的な努力に帰着することになる。そしてそこでもなお、分析は二つの要素を区別することができる。超器質的力と、必然的にそれと関係する生きた抵抗とを」(*Ibid.*, p. 187)。

藤 江 泰 男

この原初的事実を正しく表現すること，これこそ，メーヌ・ド・ピランの哲学の不変のテーマだと言えるだろう。